

乳幼児の父親がもつ「父親になった実感」とその関連要因 — 父親の属性および育児・家事参加度との関連において —

田辺 昌吾

大阪市立大学大学院生活科学研究科 後期博士課程

Factors Related to “Realization of Having Become Fathers” among Fathers Parenting Pre-school Children — in Relation to Paternal Characteristics and Participation in Child Care/Housework

Shogo TANABE

Graduate School of Human Life Science, Osaka City University

Summary

The purpose of this study was to clarify the process that a man, who is a father biologically, becomes a father psychologically. I investigated the moment that fathers realized (or would realize) they had become fathers. A factor analysis of questionnaire responses by 213 fathers parenting pre-school children yielded 7 factors for the structure of “realization of having become fathers”. This study then investigated the relevance between the 7 factors, paternal characteristics, and participation in child care/housework. The main results were as follows. (1) Children’s age and sex and fathers’ age when the first child was born caused different degree of the realization of fatherhood. (2) Fathers who participated more frequently in child care/housework estimated that they would realize they became fathers in their children’s independence. (3) Fathers who came home late and participated more frequently in child care/housework were at a lower degree of the realization of fatherhood in the moments of father-child psychological relationship. Accordingly, it is suggested that father-child relationships are central in the process of becoming a father psychologically.

Keywords : 父親 *Fathers*, 父親になった実感 *Realization of having become fathers*, 乳幼児 *Pre-school children*, 育児・家事参加 *Participation in child care/housework*

I. 問題・目的

近年、発達心理学の領域において生涯発達という捉え方が一般的となってきた。それは「生まれてから死ぬまでの生涯を通しての人の心的な変化を扱うこと」¹⁾であり「たんに子どもがおとなになる過程のみならず、おとなの時期における変化や老人期の衰退を中心とした変化をも含み込むということ」¹⁾である。この生涯発達という捉え方への関心の高まりと連動して、親になる経験や子育ての経験を、個人の生涯発達プロセスの中に

位置づけ、親になる経験を通して生じる様相や、個人にとっての子育て経験の意味を明らかにしようとする試みが、近年盛んに行われてきている²⁾。

また、現代の日本で見られる社会変動が親や子を取り巻く状況へ影響を及ぼしていることも指摘されている。畠中³⁾は戦後の日本社会は「富裕化」社会であり、一方で私事の自由を肥大化させながら、他方で規範を希薄化させ、この文脈において、家族も大きく変貌してきたと述べている。また、柏木⁴⁾は「労働力の女性化」と「高

「年齢化および少子化という人口動態上の変化」という大きな社会変動は、家族をゆるがせ、男性・女性の生活と心の変化・発達を促している」と指摘している。その一例として、柏木・永久⁵⁾は、子どもは「生まれる」「授かる」から、子産みは条件と勘案して「つくる」ものという認識、換言すれば“産む”という女性の主体的判断結果となる方向への転換が起こっており、その結果、女性における子どもの価値にも変化が見られることを明らかにしている。

こういった社会変動に伴い、親になる意識や親として存在することも変化してきていると考えられる。ただ、社会変動に伴うライフサイクルの変化に関しては、その多くは女性の側について論じられている。柏木⁴⁾が言うように、近年のライフサイクルの変化は女性で著しい。しかし、家族あるいは親という単位で考えた場合、女性(=母親)のパートナーである男性(=父親)は、母親の変化の影響を少なからず受けていると考えられる。就労による母親の社会進出は、それまで家庭内で母親が一手に担ってきた役割を父親にも求めることにつながっている。すなわち、家庭内での育児や家事について考えたとき、父親の側にこそ変化が見られるとも考えられる。「子育て=母親」とする性別役割分業意識に変化が見られ⁶⁾、新たな家族関係が構築されようとしている過渡期において、これまで研究の蓄積もあまり見られない父親自身の意識に焦点を当てることは価値がある。

これまでの親になることや親であることを扱った研究では、ほとんどが子どもが誕生したとき、すなわち生物学的に親となることを親になる基準として捉えている。そして、親になることによってどういった心理的な変容が起こるのか、また親として存在することはどういった心理状態であるのかを子どもの誕生の直前から主に乳幼児期を中心として検討されている。親になることによる発達に関して先駆的な研究としてあげられるのが、親になることによる人格発達の内容的側面を検討した、柏木・若松の研究⁷⁾である。柏木らは親になることによる成長・発達に関して6因子構造を明らかにし、その父母間比較、子どもの育児への感情との関連、育児・家事参加度との関連などを検討している。この柏木らの研究を基礎として、親になることによる人格発達と職業・学歴との関連⁸⁾、親になることによる人格発達の幼児をもつ親と中学生をもつ親での比較⁹⁾、父親の家庭での協力と父親自身の成長発達との関連^{10) 11)}などが検討されている。また、親になるということについて、親意識の形成過程という視点からも検討が行われている。小野寺・柏木¹²⁾は、親になる前(妻の妊娠7～8ヵ月)、親になって

7～8ヵ月後、親になって2年後にわたり縦断研究をおこない、親意識の変化を検討している。そして親になる前の意識と親になってからの意識に関して、男女に共通した意識とそれぞれに特徴的な意識とを明らかにしている。小野寺・青木・小山¹³⁾は、はじめて父親になる男性がどのような心理的過程を経て父親になっていくのかということ「まもなく父親になる意識」として6因子構造で明らかにし、親になる以前からいっていた「親になる意識」が、実際、父親になってからのわが子に対する養育態度とどのように関連しているのかを検討している。氏家・高濱¹⁴⁾は、3人の母親の子どもの誕生後の苦悩とその解消プロセスを2年間にわたって追跡し、子どもの誕生によって母親がどのような影響を受け、どのようにそれを乗り越え、その結果何が生み出されたのかを、個々人の体験の記録をもとに検討している。さらに、親は子どもや育児に対して肯定的な感情だけでなく否定的な感情も同時に抱き、親になることによって両価感情を抱くようになることがいくつかの研究で明らかにされている。菅野・岡本¹⁵⁾は、親子関係を正負双方の側面を持ち合わせたダイナミックな関係であると捉え、生後1年目の母子関係の変遷を辿り、母親の子どもに関する否定的感情の語りの分析を通して、母親になるプロセスについて検討を行っている。菅野¹⁶⁾は、母親が子どもに対してもつ否定的感情が母子関係の中で果たすポジティブな役割について、不快感情の内容とそれに対する説明づけから記述的に検討している。また、親となった自己をどのように認識するかは、親として存在することに大きな影響を及ぼすと考えられ、このことを親同一性という視点から検討した研究に山口の一連の研究^{17)～20)}が挙げられる。

上記のような先行研究の概観から、親になるということについてのより根本的な部分、すなわち親自身はいつたいつどのような場面で親になったと実感するのかという「親としての実感」を扱う視点があまり取り入れられていないことに気づく。妻の妊娠期において、父親となる実感を強く感じている男性は、父親となる心の準備がしっかりできており、子ども誕生後、子どもへの共感がうまくできると答える傾向が強いことが明らかにされている¹³⁾。心理的にも父親となるためには、妻の妊娠期だけでなく、子どもの誕生後の様々な関係性から得られる父親になったという実感が大切であると考えられる。

以上より、本研究では父親になるということを経験的な面から捉えるにあたって「父親自身が父親になったという実感をどのような場面でどの程度得ているか」の評価から検討することとした。そして、「父親になった実

感」を規定する要因として、父親が育児や家事へ参加することが父親自身の意識に影響を与えるとする先行研究^{7) 13)}に習い「育児・家事参加度」を挙げ、双方の関連を検討する。また、対象者であるが、先行研究でも多く扱われており、親意識の形成には乳幼児期の子どもとの関わりが重要である²¹⁾とする知見、さらに今後父親の役割が大きく変化する時期と考えられることから、乳幼児期の子どもを持つ父親とする。

Ⅱ. 研究方法

1. 対象者と手続き

調査対象者は、大阪府下の公立幼稚園1園、私立幼稚園1園、子育て支援センター1施設に通う子どもをもつ父親505名である。2004年7月から11月に各施設を通して質問紙を配布し、各施設にて回収をお願いした。有効回収票は213票であり、有効回収率は42.2%であった。父親の平均年齢は35.9歳(25～51歳)、就労形態はフルタイム204名(95.8%)、その他9名(4.2%)、平均帰宅時間は20.8時(17～26時)であった。子どもの数の平均は1.9人(1～6人)、第一子の平均年齢は5.7歳(0～16歳)であった。母親の就労形態は専業主婦192名(90.1%)、有職21名(9.9%)、家族形態は核家族198名(93.0%)、祖父母と同居15名(7.0%)、平均結婚年数は8.3年(2～19年)であった。

2. 調査内容

1) 「父親になった実感」に関する質問項目

父親が「父親になった」と実感する場面の選定にあたり、大阪府および滋賀県内の幼稚園・保育所に通う子どもをもつ父母各40名を対象に自由記述形式の質問紙調査を実施した。この結果^{注1)}と親の意識に関する先行研究^{7) 13) 17)}の結果とを参考に、「父親になった実感」に関する質問項目を作成した。これについて、幼児期の子どもをもつ父親2名に協力をお願いし、項目および表現の適否について吟味を求めて内容的妥当性の検討を行い、その結果、68の質問項目を確定した。この68の父親になったと実感すると考えられる場面について、各場面の経験の有無および各場面での実感の程度(〈1. まったく実感しない〉から〈4. とても実感する〉までの4段階)の回答を求めた(未経験の場面については推測での回答を求めた)。

2) 育児・家事参加度

父親の育児・家事への参加の程度を測定するために、柏木ら⁷⁾が使用した6項目からなる尺度(①子どもとの入浴②園への送り③園への迎え④食事の支度⑤食事の片付け⑥掃除、について〈1. 全くしない〉から〈5.

毎日)までの5段階での評定)を採用した。

Ⅲ. 結果

1. 「父親になった実感」の構造

68項目の質問項目を用いて因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行った。因子数は固有値1以上の基準を設け、因子負荷が0.4に満たない項目や複数の因子にまたがって高い負荷を示した項目を削除し、最終的に7因子を抽出した(累積寄与率51.4%) (Table 1)。

第1因子は、「子どもへの親の影響力の大きさに気づいたとき」「子どものことを最優先に考えているとき」「子どもから慕われていると感じたとき」などの項目で負荷が高く、子どもとの心理的つながりを必要とする内容から『子どもとの心理的つながり』因子と命名した。第2因子は、「家庭と仕事の両立ができていたとき」「妻の心の支えになれていると感じたとき」「家庭的な面をもっている自分に気づいたとき」などの項目で因子の負荷が高く、しっかりとした基盤の上に家庭を築き、維持していくという内容から『家庭維持』因子とした。第3因子は、「孫ができたとき」「子どもが結婚したとき」などの項目で負荷が高く、子どもが父親の下から自立するという内容から『子どもの自立』因子とした。第4因子は、「家族内で自分が大黒柱であると感じたとき」「家族の精神的支柱になれていると感じたとき」などの項目で負荷が高く、父親が家族の中で中心的存在であるという内容から『家族の中心』因子とした。第5因子は、「園行事に参加したとき」「他の人から『~ちゃんのお父さん(パパ)』と呼ばれたとき」「子どものオムツをかえたとき」などの項目で負荷が高く、子どもとのふれあいに関する内容から『子どもとのふれあい』因子とした。第6因子は、「子どもが言うことを聞かず、イライラしているとき」「感情的に育児をしているとき」の2項目で負荷が高く、子育てにおいて感情が不安定になっているという内容から『子育て感情不安定』因子とした。第7因子は、「妻の妊娠がわかったとき」「第一子が誕生したとき」の2項目で負荷が高く、『妻の妊娠・出産』因子と命名した。各因子の信頼性係数(Cronbachの α 係数)は、第1因子より順に.87/.88/.88/.81/.80/.68/.49であった。第7因子の α 係数は.49と低い数値であったが、「父親になった実感」の構造において、妻の妊娠や出産といった生物学的に親となる過程は解釈する上で必要であると考え、削除せず因子として採用した。そして、各因子を構成する項目の素点を合計したものを各因子得点とし、比較に際してはそれを項目数で割った(Table 2)。

Table 1 「父親になった実感」の構造

項目	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	共通性
第1因子:子どもとの心理的つながり								
子どもへの親の影響力の大きさに気づいたとき	<u>.623</u>	.080	.151	.146	.080	.125	.150	.484
子どものことを最優先に考えているとき	<u>.620</u>	.347	.097	.071	.204	.089	-.012	.569
子どもから慕われていると感じたとき	<u>.614</u>	.150	.105	.152	.132	.006	-.029	.452
子どもから必要とされていると感じたとき	<u>.575</u>	.044	.014	.332	.186	-.012	.079	.484
子どもを褒めたとき	<u>.546</u>	.339	.085	.040	.243	.224	.012	.531
子どもの心情を理解したとき	<u>.529</u>	.253	.080	.345	.126	.150	-.080	.514
子どもに助言をしたとき	<u>.517</u>	.215	.035	.152	.262	.291	-.085	.499
子どもを叱ったとき	<u>.495</u>	.267	.091	.100	.261	.300	-.015	.494
子どもが困難に直面したとき	<u>.442</u>	.158	.258	.182	.174	.204	-.010	.392
第2因子:家庭維持								
家庭と仕事の両立ができていると感じたとき	.191	<u>.625</u>	.137	.268	.248	.221	-.053	.631
妻の心の支えになれていると感じたとき	.240	<u>.595</u>	.141	.276	.040	.109	.217	.568
家庭的な面をもっている自分に気づいたとき	.358	<u>.585</u>	.039	.290	.212	-.014	.056	.604
育児を夫婦で分担して行っているとき	.327	<u>.554</u>	.075	.234	.178	.159	-.049	.533
がんばっている妻を見たとき	.198	<u>.541</u>	.121	.154	.179	.342	.227	.571
家事を夫婦で分担して行っているとき	-.004	<u>.524</u>	.136	.090	.262	.200	.159	.435
冷静に育児ができているとき	.271	<u>.506</u>	.122	.278	.241	.179	-.122	.527
経済的に不自由ない生活を送れているとき	.221	<u>.463</u>	.091	.203	.064	.047	.104	.330
第3因子:子どもの自立								
孫ができたとき	.090	.033	<u>.831</u>	.046	.067	.028	.037	.708
子どもが結婚したとき	.105	.098	<u>.813</u>	.109	.088	-.116	-.053	.718
子どもが個々の家庭を築いたとき	.039	.126	<u>.771</u>	.084	.096	.154	.047	.653
子どもが自立したとき	.183	.132	<u>.743</u>	.053	.042	.087	.049	.618
第4因子:家族の中心								
家族内で自分が大黒柱であると感じたとき	.260	.299	.175	<u>.693</u>	.104	-.035	-.004	.680
家族の精神的支柱になれていると感じたとき	.224	.277	.074	<u>.638</u>	.060	.015	.112	.556
家族内での決定権をもっているとき	.180	.256	.011	<u>.584</u>	.131	.106	.050	.470
一家の稼ぎ手について考えたとき	.107	.050	.058	<u>.571</u>	.033	.120	-.112	.372
妻に助言をしたとき	.118	.244	.121	<u>.530</u>	.228	.229	.126	.489
第5因子:子どもとのふれあい								
園行事に参加したとき	.241	.074	.148	.226	<u>.732</u>	.044	.031	.675
他の人から「~ちゃんのお父さん(パパ)」と呼ばれたとき	.212	.124	.111	-.048	<u>.607</u>	.202	.206	.527
子どものオムツをかえたとき	.163	.317	.103	-.107	<u>.544</u>	.079	.146	.472
子どもの入園式に出席したとき	.257	.139	.310	.167	<u>.506</u>	-.015	.024	.466
子どもから「お父さん(パパ)」と呼ばれたとき	.107	.120	-.017	.157	<u>.487</u>	.111	.053	.303
子どもをお風呂に入れたとき	.180	.284	-.077	.216	<u>.428</u>	.008	.026	.350
第6因子:子育てで感情不安定								
子どもが言うことを聞かず、イライラしているとき	.240	.220	.028	.139	.171	<u>.658</u>	.017	.588
感情的に育児をしているとき	.165	.184	.057	.114	.070	<u>.598</u>	.079	.446
第7因子:妻の妊娠・出産								
妻の妊娠がわかったとき	-.037	.100	-.033	.015	.024	.065	<u>.717</u>	.532
第一子が誕生したとき	.040	.059	.070	.007	.202	.006	<u>.448</u>	.251
寄与率(%)	10.6	9.9	8.2	7.9	7.5	4.4	2.9	
累積寄与率(%)	10.6	20.5	28.7	36.6	44.1	48.5	51.4	

Table 2 「父親になった実感」の各因子の得点の平均値と標準偏差

	平均値	標準偏差
第1因子:子どもとの心理的つながり	3.23	.54
第2因子:家庭維持	2.70	.62
第3因子:子どもの自立	2.94	.90
第4因子:家族の中心	2.89	.63
第5因子:子どもとのふれあい	3.26	.56
第6因子:子育て感情不安定	2.58	.77
第7因子:妻の妊娠・出産	3.51	.60

2. 父親の属性と「父親になった実感」との関連

「父親になった実感」を規定する要因を検討するために、まず父親の属性を独立変数に、「父親になった実感」の7因子を従属変数にし、分析を行った(就労形態、母親の就労形態、家族形態については、調査対象者が幼稚園に通う子どもをもつ父親が大部分となり、専業主婦・核家族という家庭が多くを占め、データの偏りが大きかったため、今回は分析の対象から外した)。

父親の年齢について平均値により高群、低群に2分し、両群間で各因子の得点を比較してみたところ、有意差は認められなかった。また同様に帰宅時間についても比較を行ったが、有意な結果は得られなかった。

Table 3 「父親になった実感」の第一子年齢に基づく比較(平均値と標準偏差、t値)
(低群:7歳未満, N=145 / 高群:7歳以上, N=68)

	低群	高群	t値
第1因子 子どもとの心理的 つながり	3.25 (.47)	3.20 (.66)	.55
第2因子 家庭維持	2.74 (.58)	2.61 (.68)	1.42
第3因子 子どもの自立	2.91 (.90)	2.98 (.90)	-.51
第4因子 家族の中心	2.90 (.60)	2.86 (.71)	.45
第5因子 子どもとのふれあい	3.29 (.53)	3.20 (.60)	1.13
第6因子 子育て感情不安定	2.67 (.74)	2.38 (.82)	2.52*
第7因子 妻の妊娠・出産	3.42 (.62)	3.60 (.54)	-1.49

*p<.05

続いて、父親としての実質的な経験年数が「父親になった実感」に及ぼす影響を検討するために、第一子の年齢から高低2群を構成し、各因子の得点の比較を行った。2群に分割した基準は第一子が完全に小学校に入学していると考えられる7歳以上(N=68)とそれよりも若い7歳未満(N=145)である。その結果、『子育て感情不安定』因子において、低群の得点が高群の得点より有意に高かった(t=2.52, p<.05)(Table 3)。

子育て経験の豊富さという観点から子どもの数に基づき、一人子群と二人子以上群との間で比較を行ったが有意差は見られなかった。

また、子どもの性別が「父親になった実感」に及ぼす影響を検討するために、子どもが男児のみ(N=65)、女児のみ(N=54)、男女児(N=94)の3群間での各因子の得点の差を一元配置の分散分析と多重比較を行って検討した。その結果、『子どもとの心理的つながり』因子において、男女児群の得点が女児のみ群の得点より有意に高い値を示した(F=3.74, p<.05)(Table 4)。

Table 4 「父親になった実感」の子ども性別組み合わせに基づく比較(平均値と標準偏差、F値)

	1 男児のみ N=65	2 女児のみ N=54	3 男女児 N=94	F値	多重比較
第1因子 子どもとの心理的つながり	3.17 (.62)	3.11 (.56)	3.34 (.44)	3.74*	2<3
第2因子 家庭維持	2.60 (.71)	2.63 (.68)	2.81 (.49)	2.61	
第3因子 子どもの自立	2.83 (.88)	2.86 (.96)	3.01 (.86)	1.54	
第4因子 家族の中心	2.83 (.68)	2.82 (.63)	2.97 (.61)	1.30	
第5因子 子どもとのふれあい	3.16 (.59)	3.18 (.61)	3.37 (.48)	3.30	
第6因子 子育て感情不安定	2.54 (.84)	2.45 (.80)	2.67 (.70)	1.46	
第7因子 妻の妊娠・出産	3.43 (.62)	3.49 (.66)	3.59 (.54)	1.34	

*p<.05

さらに、子ども誕生時の父親の年齢が「父親になった実感」に及ぼす影響を検討するために、父親の年齢と第一子の年齢の平均値を基に、高低の組み合わせから4群を構成した。そしてこの4群間での各因子の得点の差を一元配置の分散分析と多重比較を行って検討した結果、〈父親年齢高—第一子年齢高〉群(N=66)が〈父親年齢低—第一子年齢高〉群(N=34)と〈父親年齢高—第一子年齢低〉群(N=46)より『妻の妊娠・出産』因子の得点が有意に高かった(F=3.82, p<.05)(Table 5)。

結婚年数や結婚後子どもが誕生するまでの期間の違い(第一子の年齢の高低と結婚年数の長短との組み合わせ

Table 5 「父親になった実感」の父親年齢／第一子年齢の高低に基づく比較 (平均値と標準偏差、F値)

(父低：36歳未満，父高：36歳以上／
子低：6歳未満，子高：6歳以上)

	1 父低-子低 N=67	2 父低-子高 N=34	3 父高-子低 N=46	4 父高-子高 N=66	F値	多重比較
第1因子 子どもとの心理的つながり	3.18 (.51)	3.11 (.85)	3.24 (.41)	3.33 (.57)	1.40	
第2因子 家庭維持	2.69 (.64)	2.72 (.77)	2.73 (.51)	2.69 (.58)	.07	
第3因子 子どもの自立	2.87 (.98)	3.07 (.88)	2.90 (.88)	2.95 (.85)	.40	
第4因子 家族の中心	2.80 (.66)	2.84 (.65)	2.96 (.55)	2.95 (.65)	.93	
第5因子 子どもとのふれあい	3.26 (.53)	3.13 (.76)	3.28 (.50)	3.31 (.49)	.47	
第6因子 子育て感情不安定	2.69 (.76)	2.34 (.89)	2.64 (.72)	2.54 (.75)	.17	
第7因子 妻の妊娠・出産	3.54 (.60)	3.32 (.71)	3.38 (.67)	3.68 (.41)	3.82*	2<4, 3<4

*p<.05

から4群を構成した)が「父親になった実感」に及ぼす影響を検討したが、有意な結果は得られなかった。

3. 育児・家事参加度と「父親になった実感」との関連

育児・家事参加度を独立変数に、「父親になった実感」の7因子を従属変数にし、分析を行った(なお、育児・家事参加尺度に「園への送り・迎え」という項目が含まれていたため、子育て支援センターで配布した内、幼稚園・保育所に通園している子どものいない父親27名の

Table 6 「父親になった実感」の育児・家事参加度に基づく比較

(平均値と標準偏差、t値)

(低群：9点以下，N=45／高群：14点以上，N=47)

	低群	高群	t値
第1因子 子どもとの心理的つながり	3.27 (.43)	3.27 (.54)	-.01
第2因子 家庭維持	2.62 (.48)	2.82 (.63)	-1.71
第3因子 子どもの自立	2.71 (.97)	3.13 (.77)	-2.33*
第4因子 家族の中心	2.97 (.66)	2.85 (.68)	.88
第5因子 子どもとのふれあい	3.22 (.53)	3.44 (.52)	-2.02*
第6因子 子育て感情不安定	2.52 (.65)	2.61 (.83)	-.54
第7因子 妻の妊娠・出産	3.42 (.58)	3.56 (.63)	-1.12

*p<.05

データは、この分析では対象から外した)。まず6項目からなる育児・家事参加尺度の素点の合計を育児・家事参加得点とした。その平均値は11.7点(7~24点)であった。得点分布が広範囲にわたったため、得点の低い父親(9点以下、N=45)および高い父親(14点以上、N=47)を選び出し、この2群間で各因子の得点の比較を行った。その結果、『子どもの自立』因子において、育児・家事参加得点高群が低群より有意に高い値を示し(t=2.33、p<.05)、また『子どもとのふれあい』因子においても高群の得点が低群の得点より有意に高かった(t=2.02、p<.05)(Table 6)。

続いて、物理的な時間の有無と育児・家事への参加の程度との関係が「父親になった実感」に及ぼす影響を検討するために、帰宅時間の早遅と育児・家事参加得点の高低とをそれぞれの平均値を基に2分割し、その組み合わせから4群を構成し、4群間での各因子の得点の差を一元配置の分散分析と多重比較を行って検討した。その結果、〈帰宅早-参加得点高〉群(N=43)が〈帰宅遅-参加得点高〉群(N=41)より『子どもとの心理的つながり』因子で有意に得点が高く(F=2.63、p<.05)、また〈帰宅遅-参加得点低〉群(N=57)が〈帰宅早-参加得点高〉群より『家族の中心』因子で有意に得点が高かった(F=3.04、p<.05)(Table 7)。

Table 7 「父親になった実感」の帰宅時間早遅／育児・家事参加度高低に基づく比較 (平均値と標準偏差、F値)

(帰宅早：20時以前，帰宅遅：21時以後／
得点低：12点未満，得点高：12点以上)

	1 早-低 N=37	2 早-高 N=43	3 遅-低 N=57	4 遅-高 N=41	F値	多重比較
第1因子 子どもとの心理的つながり	3.24 (.54)	3.39 (.47)	3.28 (.46)	3.07 (.61)	2.63*	4<2
第2因子 家庭維持	2.64 (.57)	2.86 (.67)	2.78 (.51)	2.54 (.63)	2.45	
第3因子 子どもの自立	2.72 (.89)	2.95 (.94)	2.96 (.83)	3.19 (.71)	1.82	
第4因子 家族の中心	2.96 (.68)	3.00 (.55)	3.05 (.53)	2.69 (.67)	3.04*	4<3
第5因子 子どもとのふれあい	3.21 (.53)	3.43 (.52)	3.28 (.54)	3.23 (.58)	1.41	
第6因子 子育て感情不安定	2.72 (.80)	2.65 (.79)	2.57 (.84)	2.40 (.87)	1.24	
第7因子 妻の妊娠・出産	3.57 (.58)	3.48 (.68)	3.47 (.58)	3.55 (.61)	.27	

*p<.05

IV. 考察

1. 「父親になった実感」の構造とその程度

「父親になった実感」を7因子という構造で捉えた(Table 1)。「妻の妊娠・出産」因子での実感の程度が最も高く(平均値=3.51)、生物学的に父親となっていく過程では、やはり実感も高いということが示された。し

かし、この場面で数名であるが〈あまり実感しない〉や〈まったく実感しない〉という父親も見られた。ここから、生物学的に父親となっていく全ての男性が必ずしもすぐに父親になったと実感するとは限らないということが伺える。小野寺ら¹³⁾は、妻の妊娠期に父親になる実感の強い男性は子ども誕生後、子どもへの共感がうまくできると答える傾向が強いことを明らかにしている。同様に第一子の誕生時に父親になったと実感する程度によっても、その後の父親としての態度に違いがあると考えられる。生物学的に父親となっていく過程において父親になったという実感が低い男性の要因について明らかにする必要がある。今回の調査では明らかにすることはできなかったが、今後検討を要する。

また、『子どもとの心理的つながり』因子と『子どもとのふれあい』因子という直接的に子どもと関係する場面での実感の程度も高かった(平均値=3.23, 3.26)。「父親になった実感」は父-子の関係をベースにして得られていくことが示された。

一方、家族、家庭といった、より大きな関係性からも実感は生まれることが明らかにされた。『家庭維持』因子には、「育児を夫婦で分担して行っているとき」「家事を夫婦で分担して行っているとき」といった項目や「妻の心の支えになれていると感じたとき」などの項目が含まれ、夫婦関係の因子とも言える。父親が子どもと関わりをもつ前提として、しっかりとした夫婦関係を基礎に家庭を築くことが「父親になった実感」につながると考えられる。また、「家庭と仕事の両立ができていると感じたとき」や「経済的に不自由な生活を送れているとき」という項目からは、経済的に家族を養い、家庭を維持していくことが父親の役割であるという意識が関係していると思われる。小野寺²²⁾は、男性は父親になると自己の中での社会(仕事や地域活動)にかかわる自分が大きくなることを明らかにし、これは父親の役割は一家を支え仕事に専念することだと考える傾向が強い日本社会の伝統的な性別役割意識が反映された結果であると指摘している。仕事や経済的な面に関する項目が「家庭維持」因子に含まれたのにはこういった意識が影響していると考えられる。また、家族と関係する因子として、伝統的父親観の影響があると考えられる『家族の中心』因子が示された。深谷²³⁾は子どもの目に写る父親の姿は変化し、現在では大黒柱として父親が家庭の中で「立てられる」状況は姿を消して、父親は家族の一員になりつつあると述べている。しかし、父親には自分が家族の中心であるという意識があり、そのことを感じる場面で「父親になった実感」を得ている者も見られる。性別役割意識の変革

が進む現代において、この『家族の中心』因子と『家庭維持』因子での実感の程度は、今後大きく変化する可能性が考えられる。

また、実感の程度はそれほど高くはないが、『子育て感情不安定』因子は注目する必要がある。この因子は「子どもが言うことを聞かずイライラしているとき」「感情的に育児をしているとき」という、一般的には子どもに対する否定的感情と考えられる項目で構成されている。菅野¹⁶⁾は、母親における子どもに対する否定的感情の生起が母子関係の中で肯定的な役割を果たしていることを明らかにしている。それと同様に、『子育て感情不安定』場面は父親にとって否定的感情が生起する場面であっても肯定的な役割も果たしている1つと考えることができるのではないだろうか。子どもに対してイライラしたり、感情的になったりするという否定的感情が生起する場面であっても、「父親になった実感」という肯定的感情につながるのであれば肯定的役割も果たしている場面と考えられる。実感の程度はそれほど高いものではない(平均値: 2.57)が、約10%の者は得点3.5以上と実感の程度を高く評定しており、肯定的な役割としての可能性も示唆される。

将来の子どもの姿が「父親になった実感」につながる可能性も示された。『子どもの自立』因子は、子どもが父親の手を離れ、一人の人間として社会で生活していくという子どもの自立に関する項目で構成されている。山口¹⁷⁾は、「一人前の母親になるとき」として母親自身が回答したうち、約40%が子どもが自立し一人前になるときであったことを明らかにしている。これより、父親に関しても子どもが自立するときには「父親になった実感」の程度は高いものとなると考えられた。しかし、この因子の実感の程度は子どもとの直接的な関係に関する因子などと比べて高くはなかった(平均値: 2.94)。これは、子どもが自立することは乳幼児期の子どもをもつ父親にとってはまだまだ先のことであり、予測での回答にばらつきが見られたためだと考えられる。

2. 父親の属性と「父親になった実感」との関連

「父親になった実感」と関連する要因として、父親の属性からはまず、第一子の年齢が明らかにされた(Table 3)。第一子が完全に小学校に入学していると考えられる7歳を基準に分析を行った結果、第一子の年齢が低い群ほど『子育て感情不安定』時に「父親になった実感」が高いことが示された。小学生になるとある程度子どもは手がかからなくなると考えられる。しかし子どもの年齢がそれよりも低いと手のかかることも多く、イライラしたり感情的になったりすることも多いであろう。また、

父親自身の親としての対処能力の発達も考えられる。子どもが幼いうちは、同じように父親も親としては幼く、親としての経験も浅い。子どもの発達と共に親も発達することは明らかであり、親として幼いときにイライラしたことでも、ある程度の経験を積むうちに親としての対処能力が発達し、イライラすることも少なくなると考えられる。また、この高低2群間で子どもの数を比較すると、高群2.41人、低群1.72人で高群が有意に子どもの数が多い ($t=7.03$, $p<.001$)。このことから、同じ乳幼児期の子どもをもつ父親であっても、少なくとも1人の子どもを小学校に入学するまで育て、かつ複数の子どもを育てているという経験から、若い子どもの要因でイライラする場面であってもある種の余裕をもつことができ、そういった場面に対処することが可能となると考えられる。これらのような、子どもの側の要因だけでなく父親自身の要因も合わさって、子どもの年齢により、子育てに対する感情が不安定になる機会の頻度に差が生じる。現在のその差が実感の程度の差になったと考えられる。『子育て感情不安定』時における「父親になった実感」は、父子ともに未熟な段階での実感であるので、「父親になった実感」の構造においても比較的初期の段階で生起する実感であると考えられる。子どもが手のかかる時期をすぎ、父親自身も発達し不安定な感情になることも少なくなると、初期の段階での実感を経て、次なる段階での実感へと進んでいくと考えられる。ただ、「父親になった実感」の構造内の全体の順序性については、本研究では詳細に検討することはできておらず、今後の課題としてあげられる。

また、子どもの性別が「父親になった実感」に影響を与えることも示された (Table 4)。男児と女児の両性を育てている父親が女児のみを育てている父親より『子どもとの心理的つながり』因子で得点が高かったという結果であるが、これはどういうことであろうか。松田²⁴⁾は父親の子どもとの関わりには子どもの性別によって違いがあると述べ、竹内・上原²⁵⁾は子どもの性別によって父親の育児意識に差があることを明らかにしている。男児と女児の両性の子どもを育てるということは、その異なる関わり方や育児意識の生起を経験すると考えられる。このことが子どもとより密接な関係を必要とする『子どもとの心理的つながり』場面で「父親になった実感」に差を生じさせたのではないだろうか。また、竹内・上原²⁵⁾は女児の父親が男児の父親より子どもを育てやすいと感じていることを明らかにしている。一方、新谷・村松・牧野²⁶⁾は口答えや反抗というネガティブな子どもからの働きかけは、父親の親としての自覚や人間とし

ての成熟にプラスに作用することを明らかにしている。これらより、育てやすいと感じている女児のみの父親における「父親になった実感」が最も低くなったのではないだろうか。ただ、第一子の性別による比較では「父親になった実感」には有意な差は見られておらず、子どもの性別が「父親になった実感」に影響を与えるかどうかについては今後より詳細な検討が必要である。

さらに、子ども誕生時の父親の年齢が「父親になった実感」に影響を与えることも示された (Table 5)。今回の調査対象者の平均よりも若くに子どもが誕生した父親群や平均よりも高齢で子どもが誕生した父親群は、平均的な年齢で子どもが誕生した父親群よりも、『妻の妊娠・出産』時での「父親になった実感」が有意に低かった。まず、平均よりも若くに子どもが誕生した父親群が平均的な年齢で子どもが誕生した父親群よりも『妻の妊娠・出産』時の実感が低いという結果は、男性が父親となるまでの人間的成長期間の短さが「父親になった実感」の程度に影響を与えたと考えられる。すなわち、若くして父親となった男性は父親となるまでの期間は短く、人生経験にも差が生じている。ある程度の人生経験を積み、そして父親となった男性の方が親になるということに対してあまり抵抗なく、それを受け入れることができると考えられる。親になるということの計画性に違いがある可能性もある。若くして父親となった男性は、平均的な年齢で父親となった男性よりも親となることにとまどいがあったり自己の中での整理がうまくできていなかったりするのだろう。そういったことが生物学的に父親となっていく段階である『妻の妊娠・出産』時の「父親になった実感」の程度に違いを生じさせたと考えられる。一方、平均よりも高齢で子どもが誕生した父親群が平均的な年齢で子どもが誕生した父親群よりも『妻の妊娠・出産』時の「父親になった実感」が低かったということはどういうことであろうか。これについては男性の職業生活のリズムという観点から考察する。男性は学校卒業後、職業人としての生活が始まり、性別役割分業意識が根強く残る現代社会ではそれは定年退職するまで続くことが当然のことのようになっていく。結婚し子どもが誕生し父親となるまでは、職業人としての生活が自己の生活のほとんどを占める。そしてこの職業人としての生活が大部分を占める生活の期間が長いほど、新たな役割が加わったときの対応にとまどいを感じると考えられる。妻の妊娠・出産という新たに親役割を担っていく契機となるときに、それまでの仕事中心の生活リズムがいかに確立されているかが「父親になった実感」の程度に影響を及ぼすのであろう。平均よりも高齢で子どもが誕生した父

親は、平均的な年齢で子どもが誕生した父親よりも父親になるまでの職業生活のリズムは確立されていると考えられる。その確立された生活リズムの中に新たに父親役割が組み込まれようとしても、すぐに得られる「父親になった実感」は低いものになってしまうのであろう。小野寺²⁷⁾は、妻の妊娠中に自己の中で社会（仕事）にかかわる割合の大きい男性は、父親となる実感が乏しい傾向にあることを明らかにしている。このことから妻の妊娠・出産時の「父親になった実感」と職業生活との関連を指摘できる。

続いて、統計上有意さの認められなかった属性と「父親になった実感」との関連について考察する。父親としての経験の豊富さという観点を子どもの数の違いから検討したが、有意な結果は得られなかった。ここから、父親としての生活の中に状況として準備されている経験の場の多さは、「父親になった実感」にはあまり影響を与えないということが伺える。さらに、結婚年数や子どもが誕生するまでの夫婦2人だけの期間の長短による違いを検討したが、ここでも有意な差は得られなかった。リン²⁸⁾は第一子が誕生したときに迫られる適応は、男性の生活においては結婚したときに迫られる適応よりも大きいと述べている。これより、結婚期間に差があったとしても父親となるときに迫られる適応がそれまでの夫婦だけでの生活時のそれよりも大きいため、全体的に「父親になった実感」は同程度になったと考えられる。

また、妻の就労形態や家族形態との関連については、先述したように、調査対象者の偏りから専業主婦・核家族という家庭が多くを占めたため、検討することができなかった。しかし、妻の就労の有無が父親の子ども観・仕事観・性役割観に影響を及ぼすことが多くの研究で明らかにされている^{7) 29)}。また、後述する父親の育児・家事参加度や参加意識には、妻の就労形態だけでなく家族形態も影響を及ぼすことが指摘されている^{30) 31) 32)}。これらより、「父親になった実感」と妻の就労形態・家族形態とは関連があると考えられる。今後、より広範なデータから検討する必要がある。

3. 育児・家事参加度と「父親になった実感」との関連

父親が育児や家事へ参加することが父親自身の意識に影響を与えるとする先行研究^{7) 13)}に習い、本研究でも育児・家事参加度を測定し関連を検討した (Table 6)。まず、育児・家事参加度の高い群ほど『子どもの自立』因子の得点が高いという結果についてであるが、これは父親のもつ長期的視点のなかに見出せる。柏木ら⁷⁾は父親の育児・家事参加度と父親自身の育児感との関連を

検討し、育児・家事参加度の低い父親ほど「子どもは分身」感が強いことを明らかにしている。柏木らによると、子育てにあまりかかわっていない父親ほど子どもを抽象的・観念的に捉え、子どもは自分の分身であると考えるが、子育てに直接深くかかわると子どもに対して現実的で具体的な感情を抱くという。子育てにより深くかかわれば子どもは自分の分身などではなく、一人の人間として捉えるようになる。そして子どもを一人の人間として捉え、育てていくのならば、「現在」のことだけでなく「将来」についても考えが及ぶ。それはおのずとその子の将来を見据えた長期的視点をもった子育てとなり、父親は子どもが小さい頃から子どもの自立ということを視野に入れ子育てに取り組む。そして自分のもとから離れ、子どもが自立するときこそ「父親になった実感」が得られると予測していると考えられる。

次に、育児・家事参加度の高い群ほど『子どもとのふれあい』因子の得点が高いという結果について考察する。この『子どもとのふれあい』因子には、「子どものオムツをかえたとき」や「子どもをお風呂に入れたとき」といった育児・家事項目として考えられる項目が含まれる。また「子どもの園行事への参加」などはその延長上の項目と考えられる。育児・家事への参加度の高い父親は、こういった場面を経験する頻度も高いと考えられる。より多く子どもとふれあう場面があれば、そういったときに父親になったと実感することも多くなるのであろう。

しかし、育児・家事により多く参加している父親の「父親になった実感」が必ずしも高くはないことも明らかにされた (Table 7)。帰宅時間が遅く物理的な時間が少ないなかでも育児・家事に参加している父親もいれば、物理的な時間があるなかで育児・家事へ参加している父親もいる。そういった父親間の比較を行った結果、帰宅時間が早く育児・家事参加度の高い父親群が、帰宅時間が遅く育児・家事参加度の高い父親群よりも『子どもとの心理的つながり』因子で有意に得点が高かった。ここでは物理的な時間の差に注目する。子どもとの心理的つながりを必要とする場面で「父親になった実感」を得るためには、より深い子どもとの関係性が必要になると考えられる。帰宅時間が早いと物理的な時間の余裕もあり、そこから心的な余裕も持てるであろう。心的な余裕を持ち、育児や家事へ参加する父親は子どもとより密接なつながりが構築でき、これより子どもとの心理的つながりを必要とする場面で「父親になった実感」も高くなったと考えられる。一方、帰宅時間が遅いと物理的な時間の余裕がなく、時間に余裕のある者より心的にも余裕

が持ちにくいであろう。福丸³³⁾は、「仕事が忙しくて疲れているときに、子どもがうるさかったりするといつもは何でもないので、うとうとしいと思って子どもにあたってしまふ」「仕事で時間的に余裕がないと家でもイライラする。気持ちの余裕がなくなってしまう」といった「仕事役割から家庭役割へのネガティブ・スピルオーバー」³³⁾を6割の父親が感じていることを明らかにしている。帰宅時間が遅く、時間的に余裕がない中で育児や家事へ参加している父親は、それだけ時間的制約も大きくなり、心的な余裕も持ちにくいであろう。そういった状態で子どもと接したとしても、イライラしたりあたってしまったりして子どもと密接なつながりが構築し難くなるのであろう。そして子どもとの心理的つながりを必要とする場面での「父親になった実感」も低くなると考えられる。時間的余裕から生まれる心的余裕の重要性が指摘できる。ただ、帰宅時間が遅い中でも育児や家事に参加している父親は、子どものことを考え、親としての役割の遂行度も高いと言える。そういった父親が心的に余裕を持ち、子どもとの心理的つながりを必要とする場面で父親になったとより実感できるような何らかのサポートを考える必要がある。また、帰宅時間が遅い中でも育児・家事への参加度の高い父親は、性別役割意識を払拭した平等主義的志向性を内面化している可能性が考えられる。その裏づけとして、この父親群は性別役割意識を背景とした伝統的父親観の影響があると考えられる『家族の中心』因子での得点が低かった。このことより、平等主義的志向性などといった育児・家事への参加意識の違いが「父親になった実感」に影響を与える可能性が考えられる。今後、より詳細に検討する必要がある。

V. まとめと今後の課題

父親が父親になったと実感することに関して、その根本に存在しているものは何であろうか。それは子どもとの関わりであろう。父親が父親になったと強く実感するのは、子どもと様々な関係を形成する場面においてであった。すなわち、「父親になった実感」というものは子どもとの関係をぬきにしては成立しないと考えられる。生物学的に父親となることは、もちろん子どもの誕生という子どもとの関係を必要とする。心理的な面で父親になることも同様であると言える。ただ、子どもとの関係は「父親になった実感」にとって必要条件ではあるが十分条件ではないことも指摘できる。そこには妻との関係、あるいは家族、家庭といったより広い単位での関わりも重要となってくる。この点に関しては、「父親になった実感」の構造として明らかにすることはできたが、その

関連要因を家族関係的視点から検討することはできていない。今後の課題として、「父親になった実感」に影響を与える要因を家族関係的視点から検討することが挙げられる。また、その「父親になった実感」が父親自身のウェルビーイングにどういった影響を与えているのかということについても検討する必要がある。父親の親としての実感と父親自身のウェルビーイングとの関連を明らかにすることで、それが子どもあるいは家族にとってのよりよい関係構築の一助となるであろう。

最後に研究手法についてであるが、本研究では父親になったと実感すると考えられる場面のうち、経験していない場面については実感の程度を推測による評定で求めた。これは、現在はまだ経験していない場面を今後経験したときの「父親になった実感」の程度を推測での評定ではあるが含むことにより、より広範囲で長期的な視点を取り入れた「父親になった実感」の構造を明らかにすることができると考えたためである。しかし、「父親になった」との実感と「父親になった」ことの推測とは異なる次元であるとも考えられる。今後、推測での実感を「父親になった実感」として含むかどうかを検討する必要がある。

注1) この調査では、①父親である自己を実感する場面、②一人前の父親像、の2つの質問に対し、自由記述で回答を求めた。②に関しては、成熟した父親を表す語として、山口¹⁷⁾を参考に「一人前」という語を使用し、自己が成熟した父親像に達したときに「父親になった実感」がえられるのではないかと考え、質問項目とした。その結果、①では回答の約6割で「子どもと話をしているとき」といった実際に子どもとふれあいをもっている場面があげられ、その他の子どもと関係する場面と合わせると約9割が直接的に子どもと関係する場面であった。少数ではあるが「仕事に従事しているとき」といった経済的な面に関する回答も見られた。②でも子どもとの関係をあげている回答が多く、子どもとの良好な関係なくしては一人前の父親とは言えないという考えが伺えた。一方、「経済的に家族を養う」や「家庭維持につとめる」などの家庭・家族との関係、「母親のパートナーとなる」などの妻との関係を挙げている回答も見られ、父親に必要とされている要素は多岐にわたっていると考えられた。なお、②の詳細は日本保育学会第57回大会³⁴⁾において報告した。

引用文献

- 1) 無藤隆：「現代社会の変貌と生涯発達という見方」, 無藤隆・やまだようこ編, 『講座生涯発達心理学1 生涯発達心理学とは何か 理論と方法』, 金子書房, 1-9 (1995)
- 2) 坂上裕子:親の発達と主体性, 家庭教育研究所紀要, 25, 51-63 (2003)
- 3) 畠中宗一:「なぜいま「家族臨床の社会学」か」, 『家族臨床の社会学』, 世界思想社, 3-7 (2000)
- 4) 柏木恵子:「社会変動と家族の変容・発達 社会変動の発達心理学へ」, 東洋・柏木恵子編, 『社会と家族の心理学』, ミネルヴァ書房, 9-15 (1999)
- 5) 柏木恵子・永久ひさ子:女性における子どもの価値—今、なぜ子を産むか—, 教育心理学研究, 47, 170-179 (1999)
- 6) 内閣府大臣官房政府広報室編:月刊世論調査, 平成17年5月号, 31-34 (2005)
- 7) 柏木恵子・若松素子:「親となる」ことによる人格発達:生涯発達の視点から親を研究する試み, 発達心理学研究, 5, 72-83 (1994)
- 8) 若松素子・柏木恵子:「親となること」による発達—職業と学歴はどう関係しているか—, 発達研究, 10, 83-98 (1994)
- 9) 目良秋子:父親と母親の子育てによる人格発達, 発達研究, 16, 87-98 (2001)
- 10) 尾形和男・宮下一博:父親の協力的関わりと母親のストレス、子どもの社会性発達および父親の成長, 家族心理学研究, 13, 87-102 (1999)
- 11) 尾形和男・宮下一博:父親と家族—夫婦関係に基づく妻の精神的ストレス、幼児の社会性の発達及び夫自身の成長発達—, 千葉大学教育学部研究紀要, 48, I:教育科学編, 1-14 (2000)
- 12) 小野寺敦子・柏木恵子:親意識の形成過程に関する縦断研究, 発達研究, 12, 59-78 (1997)
- 13) 小野寺敦子・青木紀久代・小山真弓:父親になる意識の形成過程, 発達心理学研究, 9, 121-130 (1998)
- 14) 氏家達夫・高濱裕子:3人の母親:その適応過程についての追跡的研究, 発達心理学研究, 5, 123-136 (1994)
- 15) 菅野幸恵・岡本依子:子どもに対する母親の否定的感情と母親になるプロセス 初めて子どもをもつ女性を対象にした生後一年間の縦断的研究から, 家庭教育研究所紀要, 22, 66-74 (2000)
- 16) 菅野幸恵:母親が子どもをイヤになること:育児における不快感情とそれに対する説明づけ, 発達心理学研究, 12, 12-23 (2001)
- 17) 山口雅史:いつ、一人前の母親になるのか?—母親のもつ母親発達観の研究—, 家族心理学研究, 11, 83-95 (1997)
- 18) 山口雅史:親同一性を構成する3つの次元—幼児期の子どもを持つ母親における親同一性の構造—, 家族心理学研究, 15, 79-91 (2001)
- 19) 山口雅史:子ども優先度及び育児効力感が母親同一性形成に及ぼす影響, 愛知教育大学研究報告, 52 (教育科学編), 39-44 (2003)
- 20) 山口雅史:母親同一性と育児ストレスとの関連, 家族心理学研究, 18, 17-28 (2004)
- 21) 御園生直美:里親の親意識の形成過程, 白百合女子大学発達臨床センター紀要, 5, 37-48 (2001)
- 22) 小野寺敦子:親になることによる自己概念の変化, 発達心理学研究, 14, 180-190 (2003)
- 23) 深谷昌志:「変わりつつある父親像」, 牧野カツコ・中野由美子・柏木恵子編, 『子どもの発達と父親の役割』, ミネルヴァ書房, 14-30 (1996)
- 24) 松田惺:「父—子関係」, 柏木恵子編, 『父親の発達心理学』, 川島書店, 227-266 (1993)
- 25) 竹内和子・上原明子:子どもの発達と父親母親の育児意識, 大阪成蹊女子短期大学研究紀要, 39, 57-77 (2002)
- 26) 新谷由里子・村松幹子・牧野暢男:親の変化とその規定因に関する一研究, 家庭教育研究所紀要, 15, 129-140 (1993)
- 27) 小野寺敦子:「男性」が「父親」になる過程, 子ども家庭福祉情報, 12, 15-18 (1996)
- 28) D.B.リン:父親—その役割と子どもの発達 (今泉信人・黒川正流・生和秀敏・浜名外喜男・吉森護, 訳), 北大路書房 (1981)
- 29) 福丸由佳・無藤隆・飯長喜一郎:乳幼児期の子どもを持つ親における仕事観, 子ども観:父親の育児参加との関連, 発達心理学研究, 10, 189-198 (1999)
- 30) 石川洋子:父親の子育てと家事に対する意識調査研究, 文教大学女子短期大学部研究紀要, 35, 91-97 (1991)
- 31) 石川洋子:父親の子育てに対する意識の分析, 文教大学女子短期大学部研究紀要, 36, 61-67 (1992)
- 32) 大日向雅美・新道幸恵:「父親の育児参加」, 高橋種昭・高野陽・小宮山要・大日向雅美・新道幸恵・窪龍子著, 『父性の発達—新しい家族づくり—』, 家政教育社, 65-88 (1994)
- 33) 福丸由佳:乳幼児を持つ親の多重役割と抑うつ度と

- の関連—父親を中心としたインタビューによる調査
結果から—, 人間文化論叢, 3, 133-143 (2000)
- 34) 田辺昌吾：一人前の父親とは, 日本保育学会第57回
大会発表論文集, 666-667 (2004)

謝辞

本論文は平成16年度大阪教育大学大学院修士論文として提出したものの一部を加筆、修正したものです。ご指導下さいました大阪教育大学古市久子先生に深く感謝いたします。またお忙しい中調査にご協力いただきました幼稚園・子育て支援センターのご父母の皆様、先生方に心より御礼申し上げます。

乳幼児の父親がもつ「父親になった実感」とその関連要因 —父親の属性および育児・家事参加度との関連において—

田辺 昌吾

要旨：本研究の目的は、生物学的な父親が、心理的に「父親になった実感」をどのような場面でどの程度得ているかを評定した上で検討し、生物学的父親が心理的にも父親になる、という過程を明らかにすることであった。乳幼児をもつ父親213名から回答を得た質問紙調査の結果、「父親になった実感」の構造として7因子が抽出された。そして、その7因子と父親の属性や育児・家事参加度との関連を検討した。その結果、子どもの年齢や性別、第一子誕生時の父親の年齢が「父親になった実感」に影響を及ぼすことが明らかにされた。また、育児や家事に参加している父親ほど子どもが自立したときに父親になったと実感すると考えていること、帰宅時間が遅い中でも育児や家事に参加している父親において、子どもとの心理的つながりを必要とする場面での「父親になった実感」の程度が低いことなども示された。以上より、心理的な面で父親になる過程は子どもとの関係を中心として進行することが示唆された。